

気づいたら、ここに居た

- まちの中に当たり前存在する第3の居場所 -

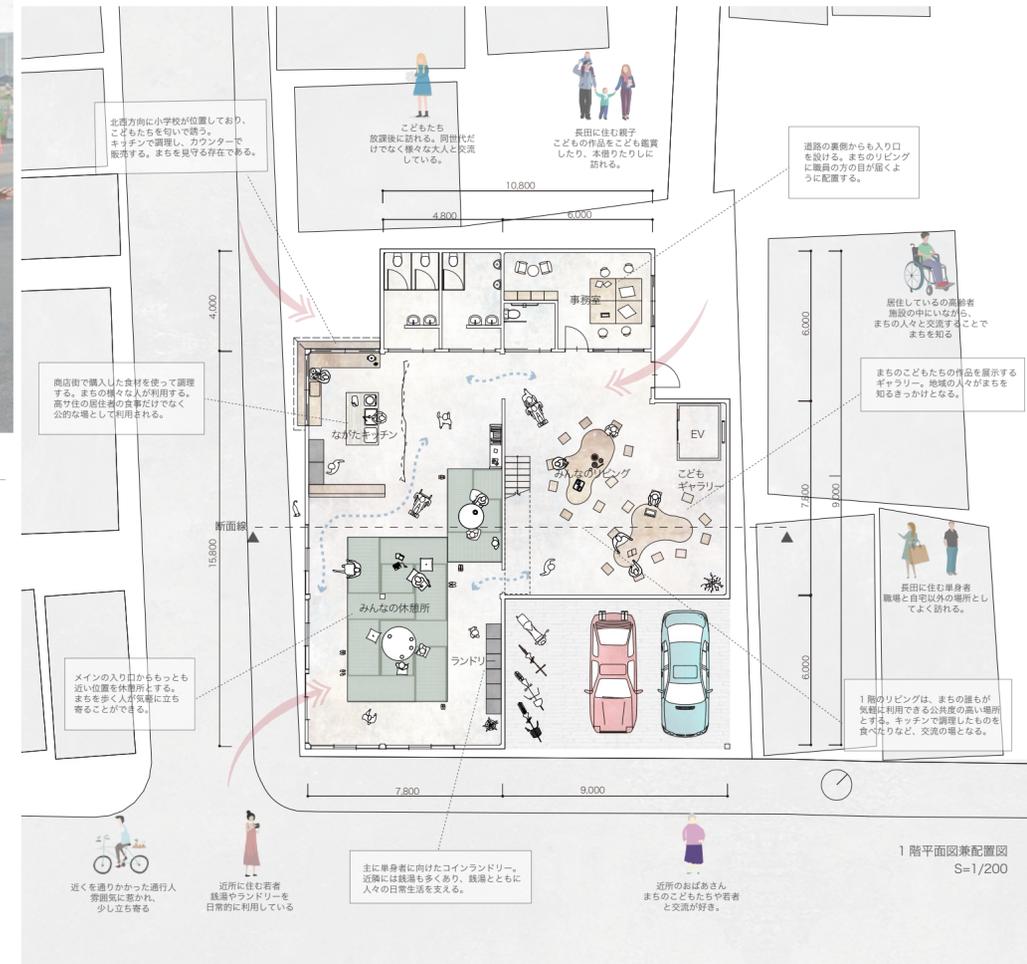


00. - 出会い -

2022年春、別の研究のために長田区を学生4人で歩いてみると、まちの方とある福祉施設に案内していただきました。そこでは、長田に住む様々な方が、世代を超えて一緒に時間を過ごしていました。

『共感』そこにいた皆さんが生きていて、介護現場の在り方にふさわしいと感じたこと『違和感』建築の自体はハコで、ソフトだけが充実していたこと、誰に対しても寛容ではあるが、やはり職員の方の家族や知り合いが多いこと

本提案では、今建っている建築とは別の姿を考えてみようと思いました。



1階平面図配置図 S=1/200

01. 提案

まちの『核』とは？
 まちとは、人々が日常を過ごす場所で、特定の誰かのためではなく公共性を持つものであること。暮らしの中心に『核』があるべきだと考えます。
 ふと気が付くとその場所に居た日々の暮らしの一端を担うことでまちの中に、地域の中に、当たり前存在するような第3の居場所を提案します

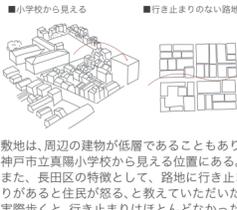
02. 対象敷地：兵庫県神戸市長田区



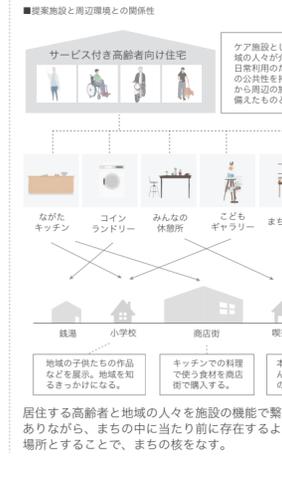
03. 長田区のまち並み

現在の長田区住宅地帯は、かつての長田区の家。写真提供：神戸市。長田区は、100年以上残り続けている木造密集エリアと、高層マンションが立ち並ぶ再開発エリアが混在している。木造密集エリアでは、今でも住民の暮らし・生業が路地にあらわれている。

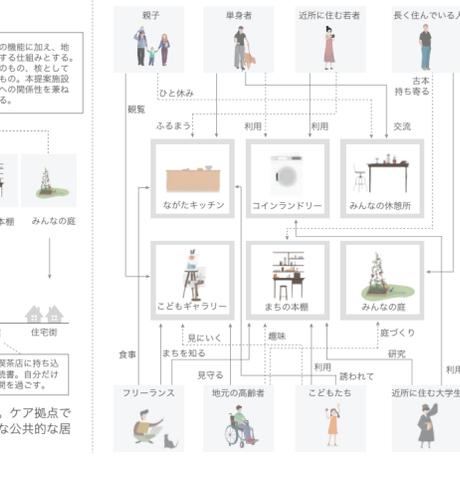
04. 敷地の特徴



06. まちの核としての福祉施設



07. まちのプレイヤーたち



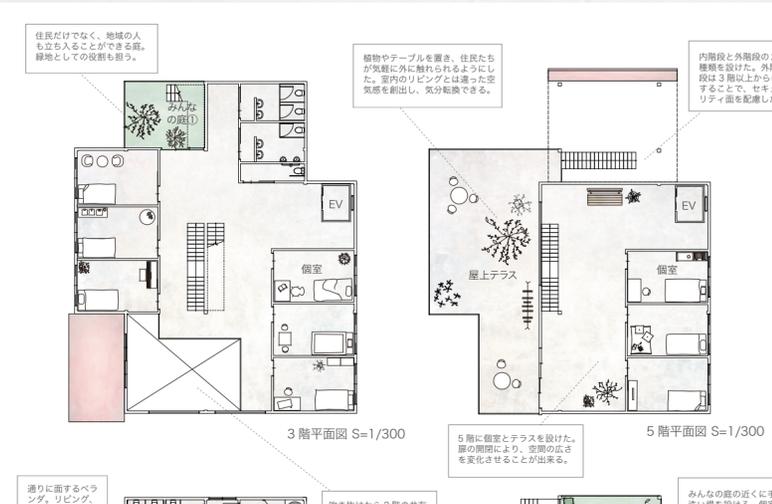
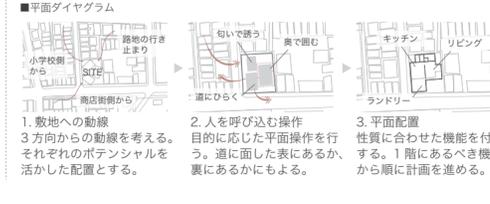
08. まちに溶け込ませる



05. 動線とゾーニング



09. 平面配置



1階 ながたキッチン：地域の人々が「食」を通して交流する。 2階 みんなの庭：小学校から見える側を彩る。まちの緑地としても機能する。 2階から1階をのぞく：カウンターから1階のみんなのリビングの様子を見ることが出来る。 1階ながたキッチンからみちろにひらく：歩いている人誘い入れるだけでなく、見守る役をもつ。